1　建物が本来持っている外部環境との境界性

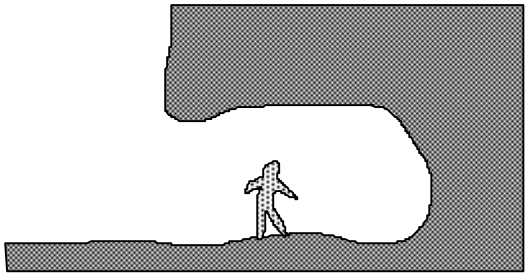
建物が根源的に有している機能は、自然の過酷な環境から人間を守ることである。雨風を防ぎ、寒さ暑さをしのぎ、虫や動物や他人など外敵から身を守り、他人の視線からのがれることが必要だった。岩壁をくりぬいたり、地面に穴を掘るなどごく初期の居住形態を経て、人間は屋根と壁とを発明した。

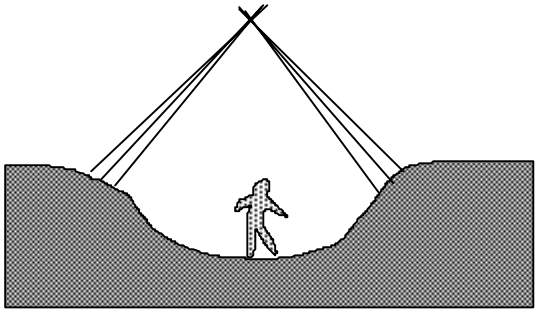
屋根は雨を防ぐのに有効で、日射による暑さをしのぐことができた。また、壁は屋根を支えるとともに風を防ぎ、外気の寒さをしのぐことができた。壁は外にあるものが中に入ることを禁止する効果があった。また、外にいる他人の視線からのがれ、見られたくないものや行為を隠す効果があった。

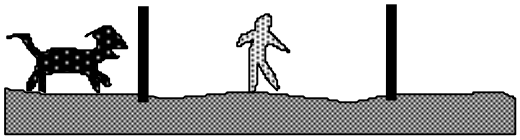
屋根と壁とを用いることにより、建物は中にあるものと外にあるものとを明確に区切ることができた。しかし、屋根や壁で中を完全に覆い隠してしまうと、中にいる人が外に出られないし、中は真っ暗になってしまう。また、中で煮炊きを行うと煙がこもり、空気が汚染される。この問題を解決するため、人間はさらに開口を発明した。開口により、建物への人の出入りと採光、換気が確保されることとなった。

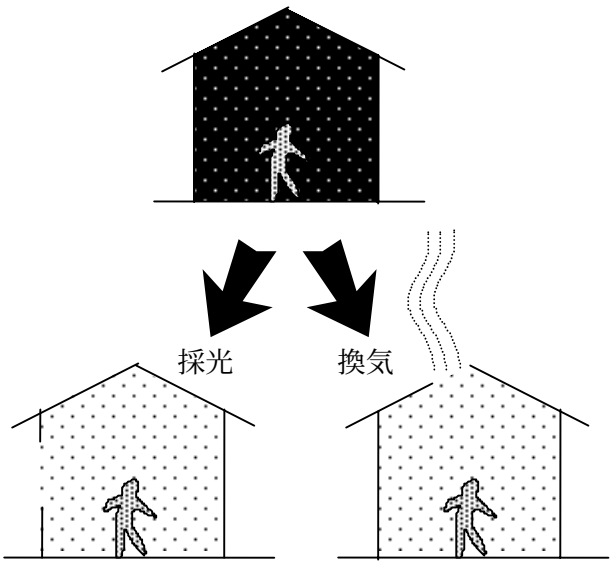
開口は先に述べた建物の根源的必要性に対してマイナスの要因である。開口があることにより雨風は入ってくるし、寒い外気も入ってくるし、虫や動物も入ってくるし、他人も入ってくるし、外から中が見えてしまう。それでも、中の環境をもう少しまともなものにするためには、少しのマイナスはやむを得ないとして、開口は許容された。

外部環境から切り離されたために逆に閉塞されてしまった内部環境を開放するために、





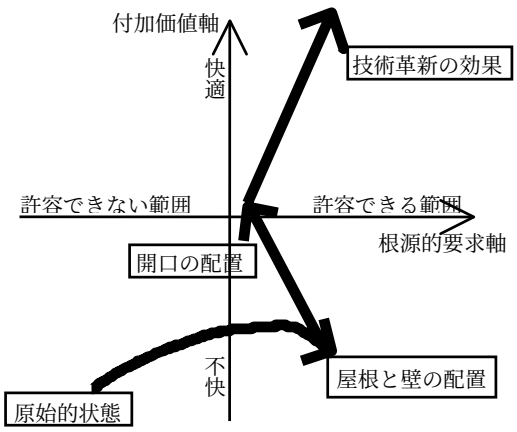




開口の効果

開口は内部環境を切り開く有効な方法として用いられているのだ。開口の存在によりマイナスとなる部分に対しては、技術の発展とともに開閉自在の扉であるとか、光を通すガラスなどが開発され、そのマイナスは次第にマイナスではなくなった。この結果、人間は開口の存在を特別疎ましく思わなくなったどころか、新たな付加価値としての意義を認めるようになったのである。

右の図は根源的要求と付加価値というふたつの軸により評価したものである。このように課題解決にあたっては、根源的要求軸に対して常に「許容できる範囲」に位置し、その上で付加価値軸に対して「快適」である方向に向かうことが重要であるといえよう。



課題解決のための評価方法